



## 中学生における失敗に対する価値観についての検討

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2016-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤川, 聡, 前迫, 孝憲, 水上, 丈実 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/00006504">https://doi.org/10.32150/00006504</a>

## 中学生における失敗に対する価値観についての検討

藤川 聡・前迫 孝憲\*・水上 丈実

北海道教育大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻（教職大学院）

\*大阪大学大学院人間科学研究科

## Discussion of Beliefs about Failure in Junior High School Students

FUJIKAWA Satoshi, MAESAKO Takanori\* and MIZUKAMI Takemi

Graduate School of Education, Hokkaido University of Education

\*Graduate School of Human Sciences, Osaka University

### 要 旨

本研究は、中学生が失敗に対してどのような価値観を持っているかについて把握することを目的とした。方法は、アンケートから得られた中学生の失敗に関する価値観を先行研究による内容の類似性に基づいて分類した。そして、先行研究で示されている大学生・大学院生の傾向と比較しながら、中学生における失敗に対する価値観について検討した。その結果、「起こしたくないこと」、「ネガティブ感情の引き金」、「学習の機会」といった3つの大きなカテゴリーが得られた。また、大学生・大学院生と比べて、どのカテゴリーにも位置付けられない回答が多く見られた。その理由として、中学生は思考が未発達・未分化であり失敗の価値観を適切に表現できない生徒がいることが予想された。また、 $\chi^2$ 検定及び残差分析の結果、中学生は大学生・大学院生と比べ、失敗を肯定的に捉える傾向が有意に高いという結果が得られた。その理由として、義務教育の中では失敗に対する支援と肯定的な価値付けが行われているケースが多いことなどが推察された。

### 1. はじめに

学習活動の中で、児童生徒は様々な失敗を経験する。教師は出現する児童生徒の失敗を適切に支援し確かな学力や豊かな人間性へと導くことが求められる。学習場面における児童生徒の失敗場面は、教師にとって重要な局面の一つである。

学習活動における失敗体験の有益性については

様々な方面から述べられている。文部科学省（2001）<sup>1)</sup>は「失敗には必ず理由があり、失敗からは必ず学ぶべき知識（教訓）が得られるものとして取り扱うべきである」という見解を示している。また、市川（1991）<sup>2)</sup>は「教訓帰納の立場では失敗経験の生かし方を学ぶことを学習の基本とする」、「学習の成果とはどのように教訓を抽出できたかということである」と述べている。畑村

(2008)<sup>3)</sup>による「失敗学」では、「失敗に学ぶことが真の理解につながる」との見解が示されている。さらに、「失敗学」に関する一連の論考<sup>4),5)</sup>において、失敗を後につながる有用な失敗とさらなる悪循環を生む失敗とに分類している。

失敗に対する価値観は児童生徒により様々である。失敗に対して肯定的な価値観を持ち、後につながる教訓として生かせる児童生徒もいれば、「恥ずかしいもの」、「許されないもの」などの否定的な価値観に縛られ、失敗を教訓として生かすことができない生徒もいるであろう。

そこで本研究では、義務教育の最終段階である中学生に着目し、失敗に対する価値観について検討する。中学生に着目したのは、これまで義務教育の中で守られていた状況から、卒業後は自分の力で問題を解決する場面が増えるため、中学生の段階で失敗に対する価値観がどのように形成されているかを把握することは教育学的に意義があると考えたからである。本研究では、中学生を対象に自由記述によるアンケート調査を実施する。そして、得られた結果から中学生の失敗に対する価値観について検討したい。

値観について検討したい。

## 2. 先行研究より

三沢ら (2006)<sup>6)</sup>は、大学生・大学院生53名(平均年齢21.5歳, SD=1.61)を対象に失敗に関する価値観を検討している。そこでは、53名の学生・院生を調査対象とし、失敗に対する価値観について文章完成法により回答を求め、得られた回答から失敗の価値観を構造化している。具体的には、「私にとって失敗とは...」という文章を提示し、後に続く文章を自由に考えさせ、10個の回答欄に記述させている。そして、得られた記述をKJ法により内容の類似性に基づいて分類し、各カテゴリーの名称を決定している。三沢らによる「大学生・大学院生の失敗に関する記述をKJ法により整理した結果の結果」<sup>7)</sup>を図1に示す。

三沢らはKJ法により、4つの大カテゴリーを見いだしている。4つの大カテゴリーはそれぞれ、「起こしたくないこと」、「ネガティブ感情の引き金」、「起こりうること」、「学習の機会」と命名さ

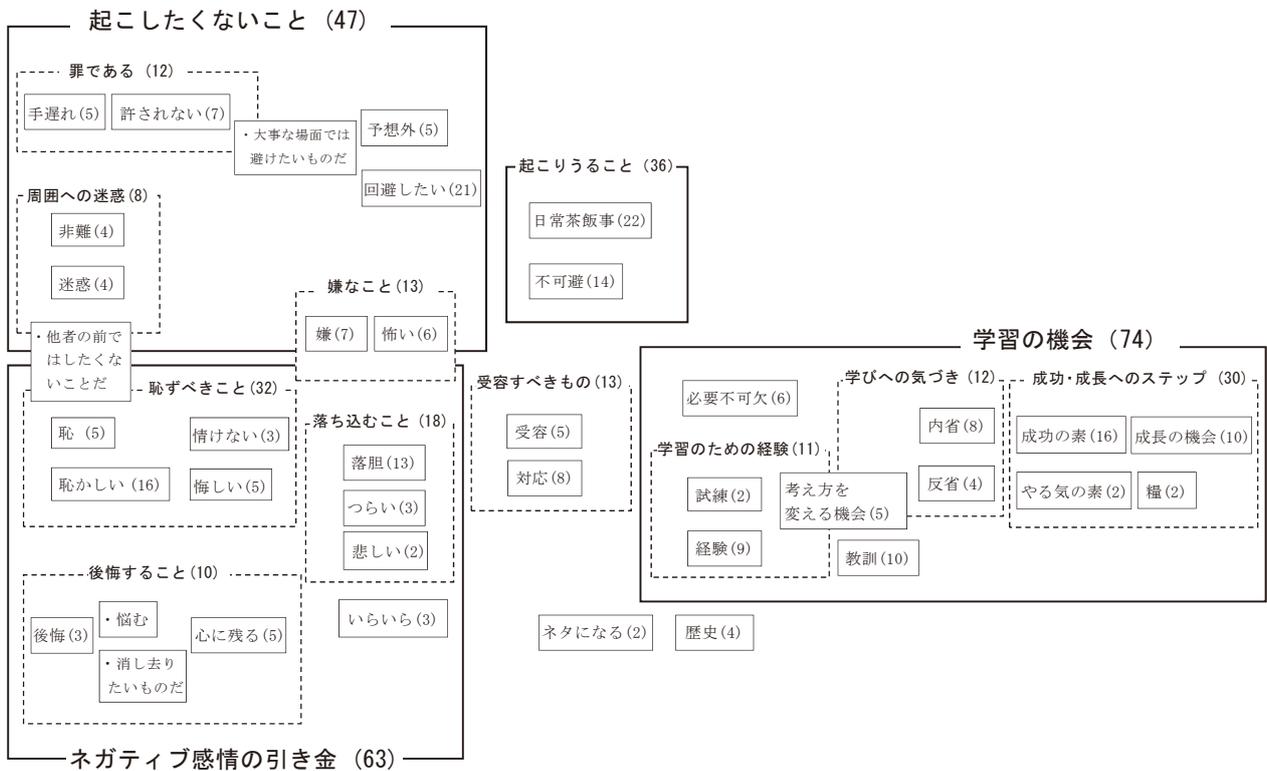


図1 大学生・大学院生の失敗に関する記述をKJ法により整理した結果 (三沢, 2006より)

れている。

図1の左側に位置している、「起こしたくないこと」、「ネガティブ感情の引き金」は、失敗に対する否定的な価値観を持つ群と捉えられている。そして、図1の右側に位置している、「学習の機会」は、失敗に対する肯定的な価値観を持つ群と捉えられている。さらに、図1の中央に位置している、「起こりうること」は、否定でも肯定でもない価値観を持つ群と捉えられている。また、いずれの大カテゴリーにも含まれない重要な中カテゴリーとして、「受容すべきもの」が見いだされている。

本研究では、上記の三沢らによる研究（以下、先行研究）を参考に、中学生の失敗に対する価値観の把握を試みる。

### 3. 方法

調査は2016年2月、X県Y中学校の93名（1年生33名、2年生31名、3年生29名）を対象に実施した。方法は、「私にとって失敗とは...」という文章を提示し、後に続く文章を自由に考えさせ、10個の回答欄に記述させた。そして、得られた記述を4名の評価者が先行研究による内容の類似性に基づいて分類した。4名の評価者の属性は、教育学を専門とする大学院生2名、教育学を専門とする大学院生であり現職の中学校教員でもある2名（教員経験はそれぞれ、23年、10年）である。なお、分類化およびカテゴリーの命名については、三沢らの結果（図1）を参考にした。以上の手続きで得られた結果から、中学生の失敗に対する価値観を把握する。

また、中学生における失敗に対する価値観の傾向を把握するにあたり、先行研究における大学生・大学院生の結果との比較を行う。比較の方法は、失敗に対する否定的な価値観を持つ群（以下、否定群）、失敗に対する肯定的な価値観を持つ群（以下、肯定群）、否定でも肯定でもない価値観を持つ群（以下、中間群）の各度数（回答数）について、 $\chi^2$ 検定及び残差分析にてそれぞれの群の偏りを調べる。

以上、先行研究で示された大学生・大学院生の結果を参考に、中学生の失敗に対する価値観を考察する。

## 4. 結果と考察

### 4.1 中学生による記述の整理から

アンケートの結果、質問の意図と無関係な記述や読み取れない記述を除く252個の有効記述が得られた。有効率は83%であった。図2に、中学生の失敗の価値に関する記述を整理した結果を示す。

図2より、3つの大カテゴリーが見いだされた。大学生・大学院生の結果と同様、否定群として、「起こしたくないこと」、「ネガティブ感情の引き金」の2つの大カテゴリーが、そして、肯定群として、「学習の機会」の大カテゴリーが形成された。

否定群の「起こしたくないこと」の大カテゴリーは、「罪である」、「周囲への迷惑」といった小カテゴリーなどから構成されている。また、「ネガティブ感情の引き金」の大カテゴリーは、「恥ずべきこと」、「後悔すること」、「落ち込むこと」の小カテゴリーなどから構成されている。大学生・大学院生の結果（図1）と比べると、小カテゴリー内の細かな名称や数が異なるものの、全体としてほぼ同じような構成となっている。これらにより、中学生においても失敗にネガティブな価値が付随することが確認された。

肯定群の「学習の機会」の大カテゴリーは、「学習のための経験」、「学びへの気づき」、「成功・成長へのステップ」という小カテゴリーなどで構成されている。ここでも、小カテゴリー内の細かな名称や数が異なるものの、大学生・大学院生の結果と同じような構成となっている。ただし、「成功・成長へのステップ」については89個もの記述からなる大きなカテゴリーを形成している。失敗を学習と成長のための有益な経験であると捉える傾向が強く表れている。

中間群では、「起こりうること」、「受け入れるもの」、「受け入れたくないもの」、「存在に関わるもの」といったカテゴリーが見られる。しかし、

大学生・大学院生に見られた大カテゴリーは形成されなかった。また、「受け入れたくないもの」、「存在に関わるもの」については、評価者が位置づけに悩んだ部分である。「受け入れたくないもの」については、その内容が、「存在しない」、「わからないもの」、「決して間違いではない」となっている。これらについて、評価者は、中学生の自身の失敗を認めようとしなない心情と読みとっている。評価者は、この小カテゴリーを、「受け入れるもの」と近い場所にあるものと捉えている。また、「存在に関わるもの」については、その内容に「生まれてきたこと」、「この場にいること」、「死ぬこと」を含んでいる。「生まれてきたこと」、「この場にいること」については、自己否定とも諦めや受け入れとも取れる。評価者はこれらについて「諦め」に近いのではないかと推察している。また、「死ぬこと」については、否定群の大カテゴリーである「起こしたくないこと」に位置付けても良さそうである。しかし評価者は、最近の中学生は些細なミスや、自分の思い通りに事が進まなかつ

た時に、「死んだ!」、「死ぬ」などの言葉を簡単に使うことから、これらはあまり深刻な意味ではなく、諦めや受容に近い可能性を指摘している。

以上の通り、中間に位置している記述は、大学生・大学院生のそれと比べ、曖昧で解釈や位置づけが困難な回答が多数存在している。その原因として、中学生は思春期であり価値観が定まっていない可能性が指摘できる。また、思考が未発達もしくは未分化であり失敗の価値観を適切に表現できない生徒がいることも予想される。上記の曖昧な記述は、年齢を重ねるにつれて失敗の蓋然性に関する信念が形成されることで、図1で見られる「日常茶飯事」や「不可避」へと移行し、「起こりうること」の大カテゴリーが形成されるのではないかと考える。

#### 4.2 各群の偏り（大学生・大学院生との比較より）

中学生における失敗に対する価値観の傾向を把握するにあたり、大学生・大学院生の結果との比

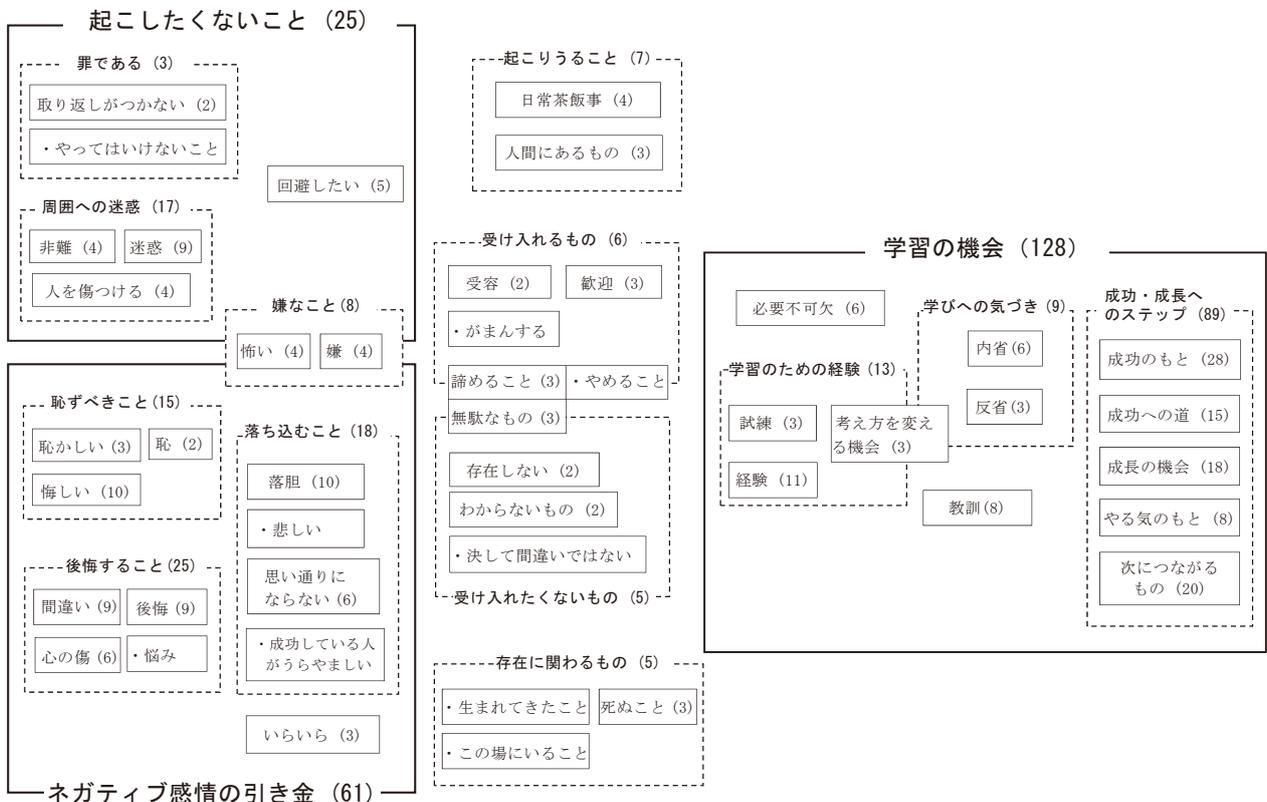


図2 中学生の失敗に関する記述を先行研究に基づき整理した結果

表1 中学生及び大学生・大学院生の失敗に対する価値観における各群のクロス表

		否定群	中間群	肯定群	$\chi^2(2)$
中学生	回答数 (割合)	94 (37.3%)	30 (11.9%)	128 (50.8%)	25.9**
	期待値	108.3	42.4	100.8	
	調整標準化残差	-2.7**	-3.0**	4.9**	
大学生・大学院生	回答数 (割合)	124 (49.0%)	55 (21.7%)	74 (31.5%)	
	期待値	109.2	42.6	101.2	
	調整標準化残差	2.7**	3.0**	-4.9**	

$\chi^2$ 検定及び残差分析, \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

較を行った。そのため、中学生及び大学生・大学院生における、「否定群」、「中間群」、「肯定群」の各度数（回答数）について、 $\chi^2$ 検定及び残差分析を行った。その際、中学生及び大学生・大学院生の各回答（各記述）において、「起こしたくないこと」、「ネガティブ感情の引き金」の2つの大カテゴリーを否定群、「学習の機会」の大カテゴリーを肯定群、それ以外の否定とも肯定とも言えないものは全て中間群とした。表1に、中学生及び大学生・大学院生の失敗に対する価値観における各群のクロス表を示す。

表1より、中学生は大学生・大学院生に比べ、否定群は有意に少ない結果となった。中間群においても同様であった。一方、肯定群については、大学生・大学院生に比べ有意に多い結果となった。この結果から、中学生は大学生・大学院生に比べ、失敗を肯定的に捉える傾向が高いということが示唆された。

これらの理由としては、いくつかの原因が予想される。まず、考えられるのは、「失敗は成功のもと」という言葉（あるいはそれに類似した言葉）が教育の中で多用されていることである。学校教育や家庭教育の中では、生徒が失敗しないように適切な支援が行なわれている。また、たとえ失敗しても、「失敗は成功のもと」という言葉とともに、それらを乗り越えさせるための教育的支援が行われ、失敗に対する肯定的な価値付けが行われていることが予想される。

一方、大学生・大学院生は、中学生に比べ周りからの支援が少なくなる。様々な失敗に直面する

中で現実を知り、これまで抱いていた失敗に対する根拠のない肯定的な価値観が他のカテゴリーへと再配置されたのではないかと考えられる。

失敗は、学習と成長に繋がる (Sitkin, 1992)<sup>8)</sup>とする肯定的な捉えがある一方で、動機付けの低下 (Dweck et al, 1973)<sup>9)</sup>や無力感 (Seligman, 1972)<sup>10)</sup>を引き起こす危険性も指摘されている。特に動機付けについては、学習を支える重要な要素である。失敗を教訓として帰納し、学習を促進させるためには、失敗を肯定的に捉える価値観を持つことが重要な位置を占めると考えられる。それらを踏まえると、本研究において中学生の大半 (50.8%) が失敗に対して肯定的な価値観を有していたことは、教育学的に見て良い傾向が確認出来たのではないかと考えられる。しかし、否定群や今後どのように変容するかわからない不安定な中間群も存在しているため、教育現場では出現する児童・生徒の失敗に対して個々に応じた適切な支援が求められる。

## 5. まとめ

本稿では、中学生の失敗に対してどのような価値観を持っているかを検討するため、アンケートから得られた中学生の失敗に関する価値観を先行研究に基づいて分類した。そして、先行研究で示されている大学生・大学院生の傾向と比較しながら、中学生における失敗に関する価値観について検討した。その結果、以下の知見が得られた。

1) 「起こしたくないこと」、「ネガティブ感情の

引き金」,「学習の機会」といった 3つの大きなカテゴリーが得られた。

- 2) 大学生・大学院生と比べて, どのカテゴリーにも位置づけられない曖昧で解釈が困難な回答が多く見られた。その理由として, 中学生は思考が未発達・未分化であり失敗の価値観を適切に表現できないことが推察された。
- 3)  $\chi^2$ 検定及び残差分析の結果, 大学生・大学院生と比べ, 失敗を肯定的に捉える傾向が有意に高いという結果が得られた。その理由として, 義務教育の中では失敗に対する支援と肯定的な価値付けが行われているケースが多いことなどが推察された。

以上により, 中学生に着目し, 失敗に対する価値観について全体的な傾向が把握できたと考えている。しかしながら, 本研究においては課題と限界が存在する。以下にそれらをまとめる。

本研究では, 失敗に対する価値観を調べるため, 文章完成法により回答を求めた。その際, 得られた記述の中には, 質問の意図と無関係な記述が多く見られた。それらのほとんどは, 「テストで悪い点数をとった」, 「野球でエラーした」など, 失敗に対する価値観ではなく, 自身の失敗体験を述べているものであった。「価値観」の意味が理解できていない可能性もあるため, 今後同様の調査をする場合は, 質問の語彙を工夫する必要がある。また, 本研究では, 先行研究による分類と $\chi^2$ 検定及び残差分析を用いたクロス表により, 全体的な傾向を読みとった。しかし, 中学生における失敗に対する価値観の個人差を特定するためには, それらを測定する尺度が必要となる。今後は, 本稿で得られた知見を基に, 中学生における適切な失敗観尺度についての検討を進め, 中学生の失敗に対する価値観やそれらが学習に及ぼす影響について明らかにしたい。

### 参考文献

- 1) 文部科学省：知識活用研究会報告書－失敗経験の積極的活用のために(2001年8月10日), [http://www.next](http://www.next.go.jp/b_menu/singi/chousa/gijyutu/001/tousin/010801.html)

go.jp/b\_menu/singi/chousa/gijyutu/001/tousin/010801.html (2013年1月1日最終閲覧)

- 2) 市川伸一：実践的認知研究としての「認知カウンセリング」, 箱田裕司編：認知科学のフロンティア I, サイエンス社, pp.158-159 (1991)
- 3) 畑村洋太郎：失敗学の法則, 文春文庫, p.10 (2008)
- 4) 畑村洋太郎：失敗学のすすめ, 講談社文庫, pp.65-90
- 5) 畑村洋太郎：失敗学実践講義－だから失敗は繰り返される, 講談社, pp.65-90 (2006) 文部科学省, 2008, 小学校学習指導要領解説総則編, p.1, 東洋館出版社
- 6) 三沢良・池田浩・西元久雄・阿部真理：失敗に関する価値観についての検討, 日本心理学会第70回大会発表論文集, p.99 (2006)
- 7) 前掲6)
- 8) Sitkin, S.B. : Learning through failure: The Strategy of small losses. In B.M. Staw & L.L. Cummings (Eds.), Research in organizational behavior. Vol.14 (pp.231-266). Greenwich, Ct: JAI Press. (1992)
- 9) Dweck, C.S., & Reppucci, N.D. (1973). Learned helplessness and reinforcement responsibility in children. Journal of Personality and Social Psychology, 25, 109-116 (1973)
- 10) Seligman, M.E.P. : Learned helplessness. Annual Review of Medicine, 23, 407-412 (1972)

### 謝 辞

本研究では, 旭川市立緑が丘中学校の中島圭介先生, 小平町立小平中学校の鴻上優美先生には, 中学生の失敗に対する価値観を考察するにあたり有益な示唆をいただきました。また, 平谷祐人氏と木野克哉氏(当時, 北海道教育大学大学院院生)には, データの分析などにご協力いただきました。この場を借りてお礼申し上げます。

本稿は, JSPS科研費26381168の助成を受けたものです。

(藤川 聡 旭川校准教授)  
(前迫 孝憲 大阪大学教授)  
(水上 丈実 旭川校教授)